

APUのスペイン語教科書『CEC』とその新しい教授法

副島 健治

要旨

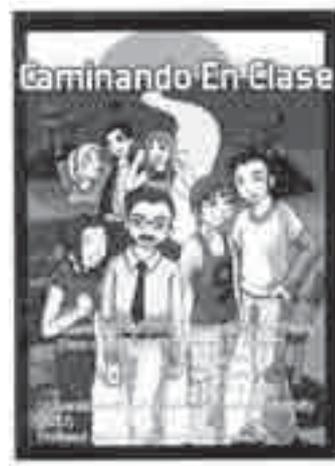
2005年10月にファン・ホセ氏(Profesor Juan José Altamirano Liebers)によってスペイン語の教科書『Caminand En Clase』(CEC)が^{セック}出された。「CEC」は教科書のタイトルであり、同時に氏の提唱する新しい教授法の名称でもある。“Caminand En Clase”とは、スペイン語で「教室の中を歩き回る」という意味であるが、その直訳通り、これが氏の教授法の根幹をなしており、広く言語教育関係者に示唆を与えるものである。本稿は『CEC』の作成に関与した筆者が、その立場でファン・ホセ氏の言語教授のアプローチ方法(CEC)と教科書『CEC』の概要を明らかにしたものである。

CECは教室内の人間関係と学生ひとり一人の自主性を重視し、氏の考える「言語学習プロセス」理論に基づく教室活動を構築している。それを具現した形が教科書『CEC』である。その教授スタイルの一つとして、学生が自ら考えるロールプレイを取り入れたマクロ・ダイナミック・グループなどがあげられる。また指導項目の提示順序や「メモリーカード」など、氏の学習者への独特の配慮と工夫が認められる。

キーワード：Caminand En Clase (CEC) 言語学習プロセス、教師と学生のあるべき姿、メモリーカード、ミクロ/マクロ・ダイナミック・グループ (DG)

1. はじめに

外国語を教授あるいは学習するにあたり、教科書は重要なアイテムである。教科書によって学生の言語学習の仕方が異なってくるなど、語学教育に携わる者にとって教科書作成は興味深いテーマである。2005年10月に一冊のスペイン語の教科書が出された¹。立命館アジア太平洋大学(以下、APUとする)のファン・ホセ氏(Profesor Juan José Altamirano Liebers)による『Caminand En Clase』(CEC)である(以下、CECとする)。CECは教科書のタイトルであり、同時に氏の提唱する新しい教授法の名称でもある。“Caminand En Clase”とは、スペイン語で「教室の中を歩き回る」²という意味である。その直訳通り、教師が教室の中を歩き回って学習者の学習支援をすることが氏の教授法の根幹をなしており、広く言語教育関係者に示唆を与えるものと思料する。この教科書の表紙(右写真)には教科書タイトル“Caminand En Clase, CEC”に続けて、「新しい教授法(Nuevo método) CEC: “Caminand En Clase”」と表示されている。ファン・ホセ氏の新しい教授法としてのCECについては本稿の前半に、教科書CECについては後半に紙数をさいた。



【『CEC』の表紙】

2. 教授法としてのCEC

2.1 基本的理念

ファン・ホセ氏は学習プロセス(後述)を示し、言語知識の形成と授業活動参加の両方をカバーしなければならないとしている。それは、ラルースに述べられているように言語でもっとも重要なのはコミュニケーションなのであり、また一方でかつ同時に、Usubelの「仮数部学習」³を参照し、両面が重要なのであると述べている。さらに加えて、氏は「想像力と創造力」を最も重要なものの一つとして強調している。(ファン・ホセ, 2006)

人々は幼年時代、認知した事柄を無邪気にすべて自分の中に取り込む。ファン・ホセ氏は、そのように学生の「新しい(学習)言語」において、クラス活動を通じて持ち合わせる知識を駆使して拡大更新し、「母語では気づかなかったことを新しい言語で培った新しい経験をする」こと、そして「新しい言語が生活の一部」になるよう知識を発展させるように考えている。この教授法における授業設計は、その文脈の中で、学習者の知識、既習事項と情意面を考えて計画・設計、組織化、評価することすべてを含むとしている。(前出)

2.2 学習プロセス(学習の包括的な記憶プロセス)とクラス参加

[巻末資料]はファン・ホセ氏が示すこの学習プロセス全体の図である(ファン・ホセ 2006, p103)。

動機付けがCECの核心であるアクティブなクラス参加に導く。学生の知識と思考はアクティブなクラスによって「それ以上の知識(意味)」を形成し、これらは包括的に同化していく。これこそがCECのクラス参加の核心である。言語の原点であるファティック⁴に源をおいた教室内の人間関係の構築があり、その上で言語としてのスペイン語を自分で理解し、失敗しながら考えて文を書き、学生自身の「仮説」を発展させて文法を理解し、正確に発音し、あたかも母語であるかのようにスペイン語を通じて感じ、表現することができるようになり、また得た知識によって問題を分析して解決することが可能となるというのである。

クラス参加は、コミュニケーションの形式であり、下の と が二重に存在する。

教師と学生...一方(教師)のリードという状況で他方(学生)に安心感を与え、学生の能力を培う。

学生と学生...学生の創造力・想像力、対話、学生の相互関係、自然さにおいて、動的関係へ発展させる。

2.3 CECにおける教師と学生の様相

ファン・ホセ氏は学生と教師が「敬意」と「友情」をもって信頼関係を維持し、次のようにあるべきであると提唱している。(前出)

[教師のあるべき姿]

教師は、好感がもてる活発で活動的な雰囲気を作り出す。教室を「ぶらぶら歩きながら」積極的・ダイナミックに学生に近づき学生を知り、学生の抱える問題解決を支援する。そのための準備をしておき、教師と学生との信頼とコミュニケーションの妨げになるような雰囲気があればそれを排除する。個々の学生の性格を知り、その学生が達成できるように「辛抱強さ」を持つ。教師は革新的でいつも新鮮さを持つ。教師はある種の「カリスマ性」を身に付ける努力をする。学生の努力を見逃さず、それを高く評価し、落胆する学生がいれば、その学生をそっと励ます。学生のグループの良好な人間関係の「インテグレータ」であること。安易な翻訳は避け、学生が「心の目」で理解するように促し、パントマイムや例を示して説明する。前もって対話と教材・教具を準備する。心の教育学⁵として学生をよく知り、個々に手を差し伸

べる教育のあり方を知っておくべきである。教師を含めた教室内の人間関係を社会的に理解し、良好な関係構築に努める。教師は学生の社会的文化的な文脈を考慮して、興味を引き起こす。野球やバスケットボールのコーチのように各プレーヤーのプレーを決める。決してプレーヤーになってはいけない。その責任においてヒットを打ったりシュートをしたりするのはあくまでプレーヤー（学生）である。学生の理解を援助するために、図表を効果的に使う。

[学生のあるべき姿]

自分のための重要な学習と位置づけ、強い意思とエネルギーで満たしておくこと。恥かしいというような気持ちは気にしないこと。教師から与えられるのを待つのではなく、「自立した学習者」であること。教師の努力を正当に評価すること。単に教師の説明を聞くのではなく、質問する。理解のマップ、チャートなどを作って理解したことを整理する。

2.4 教室活動

教師のイニシアチブのもとでの1つの学習者自身による自律学習の様相を呈する。教師が組織化する参加型コミュニケーションの会話を軸として、それには教師による学生への直接伝達と学生同士のコミュニケーションの2つがある。そして、授業中、教師は活発に学生の対話応答を促しながら教室内を歩き回る。この教師が教室内を歩き回りながら学生のコミュニケーションを促す行為が重要なのである。教師は学生たちの想像力をかきたてて、学習者が母語で話している時と同じくらい、伝えたいと思うような雰囲気を作ることが重要である。そのような中で学生は言語を習得し容易に忘れない記憶となる。具体的な教科書の中身、特に会話重視、ダイナミック・マクロ・グループ、メモリーカード等については、次の「3 教科書『CEC』について」で述べる。

3 教科書『CEC』について

3.1 教科書の構成

教科書の中には、イラスト、絵や写真がふんだんに取り入れられており、学習者の関心を視覚的に惹きつける楽しい教材に出来上がっている。ダイアログをはじめ解説部分など、基本的にすべてスペイン語で書かれているが、文法的な解説部分などには学習者の理解言語に配慮して、適宜英語訳と日本語訳が添えられている。全体が大きく5つの中南米の国名⁶のユニットに分かれており、各ユニットの扉にその国を象徴する風景や文化的な写真を配し、扉をめくると学習内容が始まる。

各ユニットは2つから5つのパートに分かれており、各パートごとにタイトルが掲げられて会話文(ダイアログ)が提示され学習が開始するようになっている。具体的には、アルゼンチン・ユニットのダイアログの“Lucía presenta a Diego y a Raquel”から始まり、コスタリカ・ユニットのダイアログの“El Clima”までの14のダイアログの構成になっている。各ダイアログごとに教科書全体の構成を見れば、最初のダイアログから「第1課」～「第14課」とみなすことができる。ダイアログで始まる各「課」の中身は、課によりやや異なるが、おおよそ次のような構成である。

[各パート(課)の構成]

タイトル、“会話文(Conv.)”、“会話内容に関する質問(Preguntas)”、“学習者自身への関連質問(Preguntas Personales)”、“その他の関連質問(Opciones)”、“語彙(Vocabulario)”、“7つの質問(Las 7 preguntas)”、“音韻(Fonética)”、“聞き取り練習(Práctica Auditiva)”、“発話活動⁷(Micro DGまたはMacro DG)”、“文法(Gramatica)”、“練習(Ejercicio Prácticos)”

3.2 学習者の心構え

『CEC』はファン・ホセ氏の考える言語教授理念に基づいて作成された教科書である⁸。氏は教科書の冒頭(“RECOMENDACION PARA LOS ESTUDIANTES” pp5-6)で学習者に対してその授業に臨む態度・心構えを述べている。[巻末資料]

この中に見える「演劇」、「想像力と創造」、「会話(マクログループ)」などは、氏のスペイン語教育の考え方にとって特に重要で、独自の教授法CECによる授業へ導く布石となっている。これは前述のCECの[学生のあるべき姿]に依拠することは言を俟たない。

3.3 教科書としての『CEC』の特徴

3.3.1 特徴

“文法(Gramatica)”で、叙法・相・時制・人称・数の文法範疇による語形変化などの説明が丁寧に行われているが、必ずしも教科書が文型シラバスで成り立っているわけではない。「会話」を重視しているので、規則変化の動詞と不規則変化の動詞の間に線引きをせず、不規則動詞の活用の「規則性」を示し、規則動詞と並べて同時に提出しているのは、この教科書の1つの特徴と言える。コミュニケーションを重視した斬新で大胆な導入の仕方と言えよう。考えてみれば、不規則変化動詞は実は不規則なのではなく、実はそこにも規則があり、それを提示しているのは首肯できることである。例を示せば、例えば、p30のユニット・アルゼンチンでは文法事項としての動詞の現在形(語尾変化)について、次のように提示されている。注目すべきは不規則動詞“HACER”の提示である。

	AR		ER		IR
	TRABAJAR(*)	ESTUDIAR(*)	HACER(*)	VIVIR(*)	
(yo)	trabajo	estudio	hago(**)	vivo	
(tú)	trabajas	estudias	haces	vives	
(usted,Él, ella)	trabaja	estudia	hace	vive	
(ustedes,ellos, ellas)	trabajan	estudian	hacen	viven	
(vosotros/as)	trabajáis	estudiáis	hacéis	vivís	
(nosotros/as)	trabajamos	estudiamos	hacemos	vivimos	

(*)語末の“AR”, “ER”, “IR”が消える。
 他の“AR”動詞: estAR; cantAR; bailAR; tomAR
 他の“ER”動詞: comER; bebER; leER
 他の“IR”動詞: escribIR; venIR
 (**) 1人称yoでの不規則変化“go”
 - “Llámame”, 動詞の原形(ORI): llámAR (IMPE +, Gram.Conv. III, pag.3)を参照。
 実際にはスペイン語、英語、日本語によって書かれている。また斜体部分はカラー(青)印刷。

発話に必要な言葉(この場合は動詞)をその時その時にタイムリーに導入するのがCECであり、他方、一般的な教科書ではAR動詞、ER動詞、IR動詞の規則変化の動詞を基本動詞として導入し、定着したところで、不規則動詞、「正字法上の変化を受ける動詞」(宮城p166)を徐々に導入していくものが多い。

3.3.2 特徴 Tarjetón(メモリーカード)

学習が少し進んだところで、学習者に対してメモリーカードによる学習事項の整理を提案している(CEC, p36)

メモリーカードとは、紙片にその時点までに学習したことを簡潔に整理させるものである。それは、例えばYo estudio.(私は勉強する)というようなある特定の文を記入するのではなく、「Yo...o」

のように主語による活用がはっきり分かるように動詞の語末（活用語尾）を記入し、他の動詞に置き換えて（語幹を変えて）カードを見ながら他の動詞でも頭の中で活用を言うなどの練習をするというものである。当然、規則動詞と不規則動詞に分けて記入するようになっている。基本的な記入法はこれだけで、それ以外は学習者が自由に見やすいように色付けしたりマークをつけたり絵や図を描き込んだり、写真を貼ってもよいとサジェストしている。ただし、「書き込んだら教師がチェックして、間違いがあれば説明し直す」とし、「（学生は）間違ったらそれを直すことが重要で、間違ったことを気にする必要はまったくない」と教科書の中で述べている。メモリーカードは蓄積していくので、ノートのように綴じていくように勧めている。またメモリーカードへの記入はその時だけでなく、学習段階が進んでいく過程でも書き足すことができるように余白を残しておくように指示している。

メモリーカードは、教科書の各ページから切り取るようになっている（下表）。ページは教科書“CEC”のページ

p37：現在文、命令文
p59：現在進行形
p77：「～が好きです」「～しなければならない」「私を～？」の文、
p119：過去の文（完了、点過去） 未来文（ira...）

3.3.3 特徴 Micro DGとMacro DG⁹

会話を重視し、「教師と学生」「学生と学生」の1対1ペア活動をマイクロ・グループと呼び、それに対して、多人数の学生間で行う会話の活動をマクロ・グループと呼ぶ。会話活動の指示は次のようなものが示されている。

<p>マイクロ DG（教科書“CEC”，チリ・ユニット第7課, p63より）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.-Saludarse.（挨拶をする） 2.-Hacer Pequeñas compras.（買い物をする） 3.-Usar vocabulario de ropa, material, etc.（服や生地の語彙を使用する） 4.-Usar tarjetón “Caso Gustar”: verbos gustar, quedar y parecer（メモリーカード“Caso Gustar”を活用する） 5.-Usar precios y formas de pago（値段や色々な支払方法に関する表現） 6.-Usar preferir y favorito（好みの表現） 7.-Practicar números desde el 100 hasta millones.（100以上100万の数字の言い方）
<p>マクロ DG（教科書“CEC”，アルゼンチン・ユニット巻末, p35より）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.-Conociendonos.（お互いを知り合う） 2.-Saludándonos y animate.（挨拶し相手を励ます） 3.-Cuidate.（「気をつけて」） 4.-Que te vaya bien.（「さようなら（気をつけて）」） 5.-¿Qué haces? Y ¡Tanto tiempo!（どうしてた? 久しぶり。） 6.-Usar tarjetón “PRES.” e “IMPE”（“PRES.”と“IMPE”のメモリーカードを活用する）

DGはほぼ毎ユニットにマイクロかマクロの活動があり、特にマクロは重要である。各ユニットで学習したことを使って口頭で実践し使えるようになることが、そのマクロDGの基本的な目的である。例えば上のようなタスクが与えられ、次のような手順と決まりで会話の実演を行う（教科書“CEC” pp34-35）。

- 1 クラスを3～5人のグループに分ける。グループメンバーはその後入れ替える。
- 2 グループに名前をつける。(配布する用紙にグループ名、メンバーを記入)
- 3 各グループで指示された内容にそって会話文を作る。(10～20分)
- 4 グループにリーダーはいない。「全員がリーダーである。」
- 5 できた会話文は、全員が自分のノートに書く。
- 6 教師は会話文を点検し、全員が自分で添削ができるように、間違いを訂正する。
- 7 各グループは、その会話の(演技)練習をする。
- 8 その授業内で終わらなかったチームは、次の授業までにできるようになっておく。
- 9 次の授業では、クラス全員の前で実演する。その場合、絵、写真その他の「小道具」を準備する。
- 10 演じる会話に未習の単語や文型などが出現する場合は、大きめの紙に書いて日本語と英語の訳を添えたりして他の学生たちの理解を助ける。
- 11 表現(演技)はジェスチャーをまじえて自然に行う。
- 12 会話は暗記しておくか、そうでなければ紙を見てもよい。
- 13 聴衆の学生たちは拍手と声援を送ること。これは重要である。
- 14 作った会話は各学生のノートに残っているので、復習に便利である。

ここで、上の手順3にあるように、会話文は学生自身が創出しなければならない、CECの基本理念の「創造と想像」が生きている。創出した会話は教師の指導を受け、決して与えられたものでなく自分のものとして実演することになる。CECの際立った1つの指導法の特徴と言える。

教師は、各グループの間を巡回して指導する必要がある。CEC(Caminand En Clase: 教室の中を歩き回る)の名前の由来もここにある。

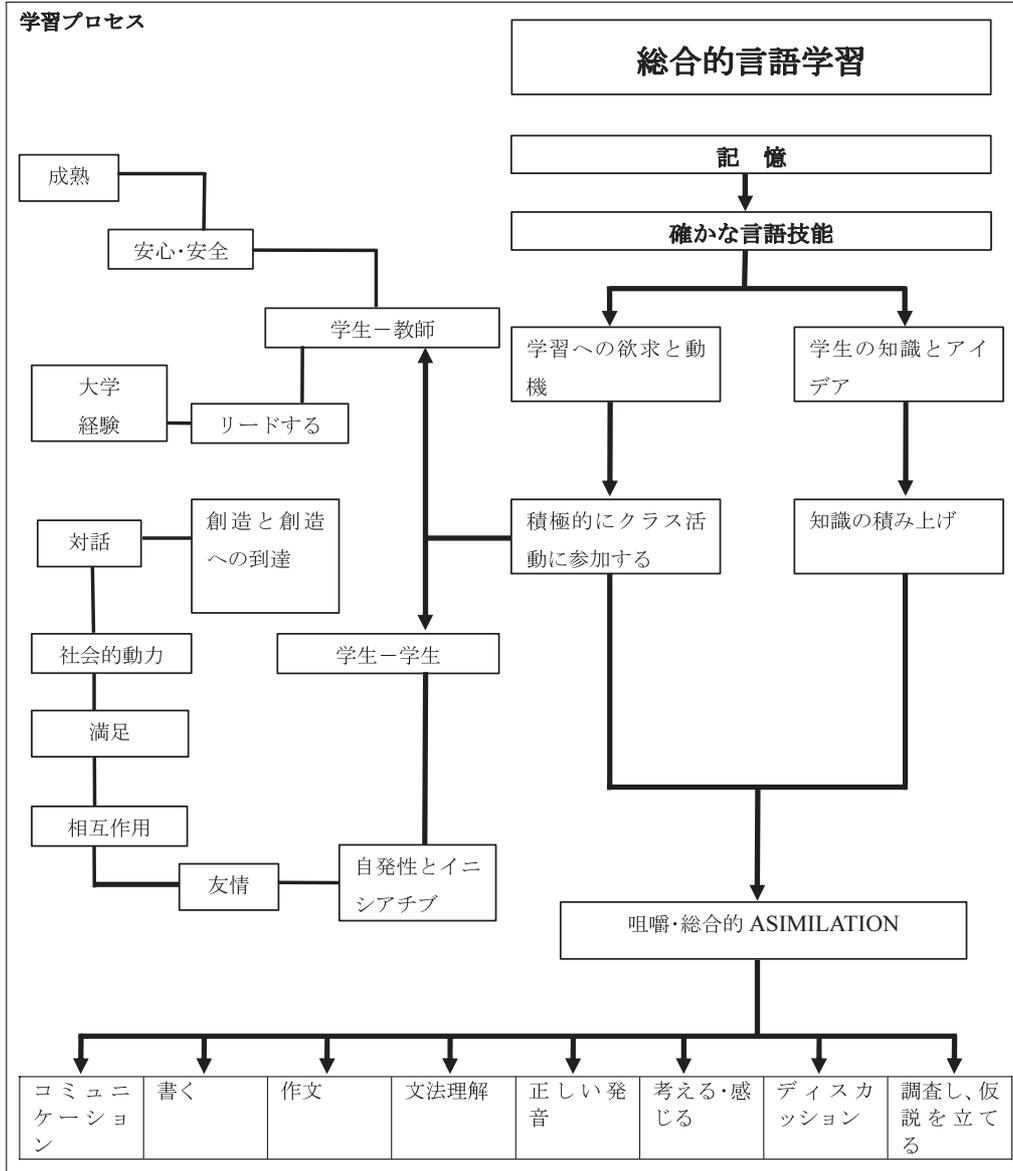
4 まとめ

ここまで、ファン・ホセ氏の考えた“CEC”というスペイン語の指導方法とそれに基づいた教科書を紹介してきた。“CEC”は、言語の学習者や学習者の学習目的などが多様化していくなかで、今後改善すべき点も出てくるであろう。その点は率直に認めつつ、その点を勘案した上で述べるが、このCECはスペイン語教育に限らず、様々な言語教育への示唆を与えるものであった。それは大胆でありながら実践的で有効な語学教授の方法であると言えるのではなからうか。“CEC”を1つの語学教育への提案と受け止めたとき、会話中心、メモリーカード、ミクロ・マクロDGの活動は、語学教師の日々の授業へのヒントを大いに授けてくれるものである。

今後、さらにより良き語学教育の理論と実践を追究していきたい。

[巻末資料]

[ファン・ホセ氏の考える学習プロセスの図式]



(ファン・ホセ, 2006, p.103より)

[巻末資料]

[学習者の心構え]

1) クラスでは元気よく頑張ってください。もし、元気が出ないと感じたら、自分をよく見つめてください。心の中にきっと頑張る気持ちがあるはず。あなたが、その気になるかどうかだけなのです。
2) 話したり質問したりするのに、恥ずかしがらないでください。そしていつも先生やクラスメートに対して敬意と思いやりの心を持ってください。
3) スペイン語を話すとき、ちょっとハイテンションで声は高めです。そのように心がけてください。
4) 話したり、発表(演劇)をしたり、宿題などをするとき、間違ふことを恐れないでください。間違っても決して落ち込まないこと! もし間違ったら、なぜ間違ったのか、どう間違えたのかを考えてみてください。少しずつ正確になっていくはず。です。
5) 出現する動詞のそれぞれの条件の活用形には、その上または下に自分で原形を書き添えてください。あなたが活用形を理解するのに、とても役に立つでしょう。
6) あなたの想像力と創造力を発揮してください。
7) 翻訳して理解するのではなく、なるべくスペイン語でそのまま理解しましょう。
8) スペイン語というあなたにとって新しい言語を、クラスの友人と共有してください。「一人は皆のために、皆は一人のために」です。もうこれからは単なるクラスメートというのではなく、このスペイン語という新しい絆によって結ばれた「アミーゴ」なのです。
9) 習ったことを先生やクラスの仲間といっしょに、教室の中や外、どこでも、実際に使ってみてください。
10) 先生やペアの人との二人会話(マイクロ・グループ)と、多人数の学生間で行なう会話(マクロ・グループ)、これらの会話は特に、しっかり準備して頑張ってください。

注

1. APUのスペイン語教科書としてコースパックの形で発行された(本体価格¥2800(税込¥2940))、APUの2005年度秋 semester の「Español (スペイン語)」の教科書として使用されている。これは「 」であるが、今後、学習段階が進んだ学習者に対応した『CEC 』『CEC 』『CEC 』...と続刊を出していくことを前提にしている。
2. 英語訳では、New method CEC: “Walking In Class”となっている。
3. ダイナミズムとして、「理解メモリー」によって経験と知識のインター・コミュニケーション・ネットワークを構築すること。
4. 挨拶に代表されるように、言葉自体にはそれほど意味はなくても、それによってお互いに関係を確認し合い、言葉を送り出す人と受け取る人とのつながりが強くなる。ファティックとは「そのような役に立っているとは思えない言葉が実は大切」で、「そうした人と人をつなぐ言葉の働き」をいう(金田一,2007)
5. 精神病患者教育学
6. 「アルゼンチン・ユニット」に続いて、「ポリビア・ユニット」、「チリ・ユニット」、「コロンビア・ユニット」、「コスタリカ・ユニット」となっている。
7. 発話にはペアワークのような少人数で行う Micro DG (Micro Dinámica de Grupos) と多人数のグループ

APUのスペイン語教科書『CEC』とその新しい教授法

で行う Macro DG (Macro Dinámica de Grupos) がある。

8 . 裏表紙には次のように明記されている。

El autor
Próximas ediciones en producción:
CEC CEC CEC CEC de negocio

これは2005年秋に出されたスペイン語初級教科書「CEC」に次いで、「CEC」, さらに「CEC」「CEC」「CEC (ビジネス・スペイン語) 」と続刊が出されていく事を予定したものであることを意味する。

9 . Micro Dinámica de Grupo と Macro Dinámica de Grupo ミクロとマクロ

参考文献

興津憲作 (1972) 『中級イスパニア語文法』, 創元社.

金田一秀穂 (2007) 『日本語のカタチとココロ NHK知るを楽しむこの人この世界 6 - 7月』, 日本放送出版協会.

寿里順平 (1989) 『基礎スペイン語文法』, 東洋書店.

副島健治 (1999) 「日本語教育実践における授業の振り返り」, 『ポリグロシア』第 2 巻, 立命館大学言語センター : pp.95-107.

(2002) 「日本語教育における授業観に関しての一考察」, 『比較文化研究』 No.59, 日本比較文化学会 : pp.45-57.

円正光 (1996) 『ラテン・アメリカ / 中南米 スペイン語常用会話辞典《増補版》』, 南雲堂フェニックス.

出口厚実 (1997) 『スペイン語学入門』, 大学書林.

寺崎英樹 (1998) 『スペイン語文法の構造』, 大学書林.

原誠 (1979) 『スペイン語入門・カセットテープ付』, 岩波書店.

宮城昇 (1953) 『基礎スペイン語文法』, 白水社.

César hernández Alonso(1984). “GRAMÁTICA FUNCIONAL DEL ESPAÑOL”, EDITORIAL GREDOS, S.A., Madrid.

Emilio Alarcos Llorach(1951). “GRAMÁTICA ESTRUCTURAL”, Editorial Gredos, S.A., Madrid.

José Altamirano(2006). Introducing the Caminand en Clase(CEC) Method, “Polyglossia”, vol.11, The Center for Modern Language Research, Ritsumeikan Asia Pacific University : pp101-107.

Kenji Soejima(2001). *Una revisión sobre la visión la enseñanza del idioma japonés — A través del estudio realizado en los países de Centro y Sudamérica —*, “RECOPIACION DE ENSAYOS E INVESTIGACIONES DE LA FUNDACION JAPON EN MEXICO” Tomo 1, La Fundación Japón en México, pp76-101.

María Fernanda de Abréu, Bernardo de Nalda, Julián Viera(1977). “Lengua Española y Literatura”, Santillana, S.A., Madrid.

Salvador Fernández Ramírez(1986). “GRAMÁTICA EAPAÑOLA”, ARCO/LIBROS,S.A.

Sánchez Ríos Domíngues(1975). “ESPAÑOL EN DIRECTO”, Sociedad General Española de Liberia, S.A., Madrid.

【スペイン語教科書】

『Caminand En Clase』. (ファン・ホセ, Profesor Juan José Altamirano Liebers著), 立命館アジア太平洋大学
(2005年度秋 semester / APUスペイン語教科書) コースバック, 2005年10月.

おわりに

『CEC』が出された当時、私たちの良き同僚でもあったファン・ホセ氏はAPUのAP言語(アジア太平洋言語)のスペイン語のコーディネーターであった。スペイン語教科書『CEC』の作成にあたり、たまたま拙子に日本語による解説を担当させていただき、同じ語学教師として多くの学びを得ることができた。ファン・ホセ氏に心より感謝したい。

また残念ながら、雇用契約上の都合で氏はAPUを離れられたが、それにより『CEC』以降の続刊が難かしくなったのではないかと危惧している。ぜひ『CEC』『同』『同』と続刊が世に出されることを願いたい。